OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	磐舟翁と春城博士
Author(s)	石濱, 純太郎
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 41-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

磐舟翁と春城博士

石濱純太郎

永田磐舟翁と云ひ松山春城先生と云ひ大切な方々を今年引續きに失はれたのは申上げ様も無い遺憾な事でありました。只に懐徳堂ばかりの損失ではなくて、大阪として又且實際は我國としての損害でなくて何でありませう。私どもは弱輩なものでモット親しく御話を伺ひ益を請ふ機會をさう得て置かなかつたのは、今想起して遺憾に堪えません。

私はなぜか初めから磐舟翁をウキツチの様な人だと獨り感じてゐました。ウキツチとは英語で魔女と云ふんださうですが、私は私で永田さんは魔女と云ふよりはウキツチなんだ、ウキツチとは永田さんの様な人なんだ、なんかんと獨りぎめにしてゐました。別に何かかう魔法の杖でも持つてゐられるからと云ふわけではなく、何だか不思議にウキツチてな感じを抱かされるからであつたんでせう、たど。所が其後段々永田さんに關するいろんな御話や逸話を聞き、又直接お話を承つたりするに從ひ、矢張りドウモウキツチに違ひない、ただウキツチはよく良くないイタヅラをする様だか、永田さんは

さうでない善いウキツチなんだと隨分勝手な解釋を下しました。ツマリ弱輩だから永田さんの偉大さを測り窮め得ない所からして失禮にも何か魔力でもあるんだと思つたんですね。その魔力と云ふのは翁の人格の力なんでせうか。或は又漢學の杖から出た魔力だと云ふんでせうか。何しろ私どもの淺薄な尺度では一寸底を知り得なかつたお方だつたのでせう。

春城先生に最後にお目に掛つたのは後から考へると、御發病の少し前何でも正月の中頃であつたかと思ひます。人込みの電車の中で呼び掛けられたら先生でありました。隨分御無沙汰をしてゐましたからキマリ惡く御詫びをしてゐますと、チト懷德堂へも序でには立寄つて君の元氣な話を聞かせてくれとの事。私は禮に嫻はぬ野人の事ですから景祉の文會などでいつも謹嚴な先生の前でもあたり關はず勝手氣儘な放論をして、君はイツモ元氣で結構だネなんかと云はれては大に恐縮したものです。然もその景祉も西村碩園先生武內昧盦先生相次いで當地を去られてからは懶けだしまして、先生が大變御熱心なのに關はらず私は下手な文章を苦勞して作るのに閉口して了ひ、湖南先生の敦煌物調査の御伴に行つてからはいゝ事にして、歸つてもその儘自分幹事の景祉を止めてしまひ自然御無沙汰になつてゐるのでした。だから先生が例の微笑をしてチト君の元氣な話をと穩に切り出されると恐縮せざるを得ないわけなのです。汗をかき乍ら何か御答を申上げてる內にお分れの所へ來て下車しました。それから後三月頃でしかた京都でフト先生の御惡い事を承つてから御見舞に參りましたがモウ御面會が出

來ない時分でありましたからお目にかゝれず、とうとう一進一退の御病狀を人づてに聞く內に逝かれました。誠に遺憾の至りであります。私は自分の學識の未熟な儘に先生の宋學の蘊蓄をも伺ふ由がなく、只寛厚なる先生の前で一向雜談に打興ずるのみに過ごしたのを顧みて忸怩たらざるを得ないのです。

どうしてかう私は後悔ばかりしてゐるのでせう。もう後悔はしたくないと思つて居ります。

故永田仁助氏を憶ふ

日本橋壽常小學校長　吉田傳治郎

私が故永田仁助氏を知る樣になつたのは明治三十九年八月當校へ赴任してから後のことである、學校沿革誌に載れる名譽職について職員から一々說明を聽いた其一人が卽ち永田氏である。

氏は二十二三歲で當校の學務委員長を勤められ當校今日の有隣會も氏の當時に創められたもので殊に有隣會なる名稱は論語の德孤ならず必ず隣ありから氏の撰ばれたものであると聞いた。其處で其名稱の會心と若年なるも旣に公共事業に老年を凌ぐ活動をせられた事については其凡ならざるを惟ひ是